

そだちのねっこ?

～乳幼児期の遊びより～



「こども園大好き・友だち大好き・先生大好き」
～子どもの笑顔は学びの芽生え～



教育センター所報
3月号掲載

1月30日(火)、0～5歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。

0歳児のクラスでは、新聞紙遊びをしていました。新聞紙を頭からかけてもらい喜ぶ子どもたち。保育者の傍に寄ってきて、自ら寝転び“かけて～!”と目で訴えるA児に対して、「かけてもいいの?準備はいい?」と子どもの思いにすぐに応えていました。予想通りに、欲求を満たされた子どもは、大好きな保育者と見つめ、笑い合っていました。安心な場所・信頼できる保育者の存在があり、“こうしたらこうなる”という見通しがもてることで、自ら欲求する姿と笑顔につながっていると感じました。



1歳児のクラスでは、音楽に合わせて体を動かすことを楽しんでいました。動物になりきる中で、全身を使いながら保育者の真似をしようとしたり、表情や声で表現しようとしている姿がとても可愛かったです。自分の体を自由自在に動かせることを楽しむ姿から、子どもたちの“やってみたい”気持ちが盛り上がる遊び環境を整えていました。「こんな環境を準備したらどう遊ぶかな?」と保育者がわくわくしながら実践することで、子どもの笑顔につながることもわかりました。



2歳児のクラスでは、病院ごっこを楽しんでいました。「鼻水が出るんです」「お腹が痛いです」という言葉に対して、「お熱はかりますね!」「お薬いりますか?」など、言葉のやりとりもしながら遊んでいました。生活の中での経験や見たことを再現しやすいように玩具の準備をしたり、保育者も患者役になりきって一緒に遊んだりしてイメージを共有できる工夫がありました。遊びが盛り上がってくると、自分の思いを伝えたい気持ちでいっぱいになっていました。「Bちゃん一緒にしよ!」「おんなじやな」など、顔を覗き込んで笑い合う姿がとてもほほえましく感じました。



3歳児のクラスでは、一生懸命に何かを作っているC児に、「何を作ってるの?」と問いかけました。C児は「パンダになりたいからお面を作ってるの」その横からD児が「私はパンダのえさを作ってるの」とすぐに返答があり、目的をもって遊んでいることがわかりました。なりたいものになりきるためのグッズをいろいろな素材から自分で選び、つくろうとする姿もありました。また、困った時はすぐ助けてくれる保育者の存在があることも、心の支えになっていました。さらに、困っている友だちに「どうしたん?」と声をかけて心配したり、「こういう風にしたかったん?」と気持ちに寄り添った言葉をかけたりするなど、あたたかい友だち同士のかかわりも見られました。





4歳児のクラスでは、忍者になって修行を楽しむ子どもたちの姿がありました。忍者になりきることで、少し苦手なことにも挑戦しようとしたり、友だちを励ましながらか一緒に遊ぶことを楽しんだりしていました。しかし、思いの違いからのトラブルは付き物です。保育者が仲立ちをし、どちらの気持ちにも寄り添いながら話を進めることで「どんな思いでそういうことをしたのか」がわかり、“折り合い”をつけようとする子どもたちの心の動きを感じることができました。子どもの浮かぬ表情や気持ちを和らげ、再び笑顔で遊び出せるように援助することも大事な保育者の役割であると思いました。

5歳児のクラスでは、友だちと一緒に『こま対決』や『ペープサートでお話づくり』『遊びに必要なものをつくる』など、ルールを決めたり、試行錯誤したりして自分たちで遊びを進めようとする姿がありました。「これ、こうしたらどう?」「いいやん!そうしよ!」など、友だちに認められることを繰り返しながら、徐々に友だちの思いも受け入れられるようになっていっていると感じました。「〇〇ちゃん、一緒に遊ぼ!」「今日はこれするねん!」など、目的をもって遊び込む姿に育っていることが、子どもたちのまぶしい笑顔から感じられました。



それぞれの学年の育ちが引継がれ、積み重なっていることがわかりました。就学前教育・保育では、子どもたちの“やりたい”意欲を大切にすると同時に、子どもたちの思いを実現できるように“ねらい”をもって環境を構成し、保育者の援助をすることが求められます。子どもたちの『笑顔』は、『こども園大好き・友だち大好き・先生大好き』が含まれており、意欲や学びの芽生えにつながる一歩だと思えます。

これからも、発達段階に応じた遊びを通して、『健康・人間関係・環境・言葉・表現の5領域』や『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』に沿って、『そだちのねっこ』を発信していきます。また、乳幼児期の教育・保育が、小学校以降の学びにつながることも期待しています。